

バイトのうぐいす

くぼ田幸子



うめみヶ原では、梅の花がみごろです。たれさがったえだには、白やうす紅、こい紅色の花がちよんちよんと咲き、どれも咲きほこっています。

うぐいすのケキヨンは、今日からバイトです。親方のあねさんうぐいすが言いました。

「ケキヨンは、あのこい紅の所で鳴いて。たのんだよ」
「わかりました」

ケキヨンは、すーい、すーいと飛んで、こい紅をめざします。

「ここかなあ」
高い木にとまって見回していると、だれかの声がしました。

「あんたはあっち。場所もわからんのか」
おじさんのようなうぐいすが、にらみつけてきます。

「すみません」
ケキヨンがあっちへいこうとすると、おじさんが言います。

「おい、新入り。鳴いてみ」
ケキヨンはドキツとします。あねさんの前で鳴いて合格をもらったのですが、自信はありません。

「ホー、ホー、ホケキヨン」
ケキヨンがぼそつと鳴きました。おじさんが、「はあ」と息をはきます。

「へたくそ。新入りって、こんなんばかりや」
ケキヨンは消えてしまいました。おじさんが、「はあ」と息をはきます。

「おれの声、聞いてみ」

おじさんは背すじをしゃんとのばして、息をすいこみます。

「ホーホケキヨ、ホーホケキヨ、ケキヨケキヨケキヨ」

おじさんの声がひびきます。梅の花が笑っているように、いい香りをはちました。

「すごーい」
「おれはな、毎日のどをきたえているんだぜ」
おじさんが胸をはります。

「ぼくバイトだから、そんなに鳴けませぬ」
「おれだってバイトだ。よく考えたら、腹立ってきたわ」

おれとこんなヘタツピーが、どうしておなじ立場なんだ」
おじさんが、梅の花をけとばしました。

「腹立つなあ。あねさんに文句言ってくる」
おじさんは、あねさんの方へ飛んでいきました。ケキヨンはしょぼんとします。

ケキヨンが持ち場で、ひっそり鳴いていると、おじさんがもどつてきました。

「あんた、クビ！ もう鳴かなくていい」
おじさんが投げつけるように言ったので、ケキヨンはつばさで顔を守りました。

「あんたはクビ。おれもあんたも、みんなクビ。わかったか」
「おじさんも？ なんで」

「これからは、オンキョウキキにたのむんだって。おれたちいらんないの」
「オンキョウキキ？」

「えーあい様とかいうヤツが作った、完璧な鳴き声を、スピーカーで流すんだって」
「はあ」

「お客さんは、いい声だったらだれでもいいんだろ。バカにしやがって。おまえもはやく消えろ」
おじさんは梅の花をまたけとばし、あっちへ飛んでいきました。

「おじさんがクビなら、ぼくがクビなんてしかたないなあ」
ケキヨンも、梅の花をけとばそうとしました。けれど、けとばすことができません。

「梅の花さん、さようなら」
ケキヨンが別れを言っていると、あねさんが飛んできました。

「よかった、まだいてくれて。あのおじさん、すぐカッかくるから」
「ぼくクビですよ」

「だからね、あのおじさんのはやとちり。最後まで聞かずに飛んでって、あんたにへんなこと言ってるんじゃないかと思つてきたら、あんのじよう」
「どういふことですか」

きました。

「自然には、上手なうぐいすもいるけど、ヘタもいる。それがいいと言いたかったのに」

「えーあい様が鳴くとか言ってたけど」
「機械の音はあきるでしょ。ヘタでもがんばってるのって、応援したくなるからいた方がいいと言つつもりが、途中で怒りだしてさ」

あねさんはため息をつきました。

「ぼく、いてもいいんですね」
「もちろん。よろしくたのむわね」

「おじさんも、クビじゃないんですね」
「いい声してるから、もう少し落ち着いてくれたらいいのになあ。今から呼びにくつもりだけど、どっち行つたか知ってる？」

「あっちです」
ケキヨンが教えると、あねさんは飛んでいきました。

ケキヨンはおじさんのように、背すじをのばして鳴いてみました。

「ホーホケキヨン、ケキヨケキヨ」